

歴史的建造物の情報保存と情報継承に関する研究 明治・大正・昭和初期に建設された近代建築

A Study on information preservation and information inheritance
of historical buildings

内藤 旭恵
Akie NAITO

(令和2年10月5日受理)

「降る雪や明治は遠くなりにはけり」は、中村草田男の有名な句であるが、既に明治元年から150年以上が経過し、当時を偲ぶ遺構は少なくなりつつある。明治・大正・昭和初期の写真を見ることがあっても、その都市景観の多くは失われており、過去の情景を知るのは難しい状況である。そこで本研究では、失われた情報に着目し、歴史的建造物の情報保存と情報継承に関して明らかにしたいと考えている。

キーワード：歴史的建造物、デジタルアーカイブ、都市景観、情報保存、情報継承
Keyword: Historical buildings, Digital Archive, Cityscape, Information storage, Information inheritance

1. はじめに

「Google ストリートビュー」や iPhone アプリの「東京時層地図」の登場によって、自宅に居ながらにして様々な地域の都市景観を簡単に閲覧可能になった。Google ストリートビューでは、現代の様々な都市に瞬時にワープし、画面上で簡単に都市空間を楽しめるようになっている。東京時層地図は、江戸時代末期から現代に至るまでの、地図と航空写真を結合して表示させることができ、その都市がどのような変遷を辿ってきたのか確認することができるようになっている。どちらも、その都市を知る上では有効なアプリケーションソフトウェアである。一方、近年着目されはじめているのは、明治・大正・昭和初期の都市景観がどのような雰囲気であったのかということである。「NHK スペシャル」に代表されるように、過去の都市を写した映像に色彩着色し、デジタルリマスター加工を施した番組が積極的に放送されているほか、「たけしのその時カメラは回っていた」などでも、上皇陛下のご成婚パレードの中継映像の中で、昭和の街並みが色濃く残っていることに注目していた。しかしながら、現代人が過去の都市景観を知ろうとした場合には、そうした番組を視聴することや過去の都市を写した写真集などを閲覧すること、さらに当時その場所で過ごしていた経験を持つ高齢者にインタビューするほかないのが実情である。

例えば、「大名小路から丸の内へ」[1]によると、坂本龍馬が土佐藩江戸城上屋敷の

近隣に住んでいた時期があったという史実は残されているが、どのような建造物に身を置いていたのかを知る由はない。また、「東京駅の100年」[2]によると、東京駅前には、当時中央停車場と呼ばれていた時代に、木造のバラック建築が点在していたが、その一つ一つがどこの所有で何のために使われていたのかといったことも情報が失われており、わからない状況である。さらに、関東大震災や東京大空襲後の写真も数多く残されているが、表通りの写真が中心で、裏通りの写真が残っていないなど、様々な情報が失われている状況であった。考古学者は、「歴史は土の中」とはよく言うが、地下を掘ってみると、煉瓦建築の基礎部分が発見され、ここにオフィスや駅などの公共建築が存在したということが明らかになったなど、地中に情報が眠っていることも多い。お茶の貿易で有名であった「ヘリヤ商会」も、神戸港近郊の旧居留地一角で営業していたといった史実は残っているが、正確な場所の特定は進んでいなかった。阪神淡路大震災後の再開発によって、神戸市役所を建て替える際に行われた発掘調査によって茶工場の基礎部分が発見され、街区が特定されたということもあった。このように、失われた歴史的建造物の情報を得るには大掛かりな作業が必要となる。

そこで本研究では、失われた歴史的建造物の情報に着目し、これからの情報保存と情報継承について明らかにしたいと考えている。明治・大正・昭和初期に建設された近代建築を対象とし、過去に「一丁倫敦」「一丁紐育」が構成されており2009年に三菱一号館の再現が行われ注目を集めた丸の内と、歴史継承を積極的に行っている早稲田大学、近年復原が実施された新橋停車場、阪神淡路大震災後に復元された神戸旧居留地十五番館、そして2017年夏に調査を実施した中国吉林省長春市、2018年夏に調査を実施した中国哈爾濱市、2019年末に調査を実施した中国河北省天津市、2020年に調査を実施した国立駅を対象として研究を行った。

2. 問題定義と先行研究のレビュー



図1. 東京府庁舎

図1は東京府庁舎の写真である。1894年（明治27年）に麹町区有楽町二丁目一番地にフランス近世ルネッサンス様式二階建て煉瓦造建築として妻木頼黄の設計で建てられたものである。1945年（昭和20年）の東京大空襲によって焼失し、現存しない建造物である。東京駅前の丸の内から有楽町一帯にかけては、明治時代から大正時代にかけて中央官庁や三菱合資会社のオフィスビルディングが次々と建設されて、一丁倫敦と呼ばれる近代都市が形成されていたことで有名である。しかしながら、その景観は現在跡形もなく失われており、再現が実施された三菱一号館と復原が実施された東京駅丸の内駅舎、さらに霞が関エリアで保存がなされている法務省旧本館など点在する建造物を残すのみとなっている。こうした景観は、建造物の解体によって失われ、二度と再び観賞することができなくなるのである。日本は、「スクラップアンドビルド型社会」とよく呼ばれているが、解体することで多くの情報が失われ、こうした写真でのみ確認することができるというのが現状である。

これまでも、内藤[3]、内藤[4]、内藤[5]、内藤[6]、内藤[7]、内藤[8]の中でも指摘してきたことであるが、日本国内においてはスクラップアンドビルドが繰り返行われてきた結果、多くの貴重な景観が失われたが、近年、部分保存や一部保存といった方法の一種である「ファサード建築」や「ファサード保存」という方法が注目を集めるようになった。一方で、そうした建造物も賛否両論あり、一部でも保存されたのだから良しとする意見がある反面、レプリカだという意見や偽物であるという意見まで存在する。日本工業倶楽部会館のファサード保存および一部完全保存が先駆けて行われ、次に三菱一号館が完全再現され、東京駅丸の内駅舎が復原され、東京中央郵便局はファサード保存がなされ、明治から大正そして昭和初期にかけての東京駅前の歴史的建造物がその姿を現した。その陰で、早い段階からファサード保存がなされていた東京銀行協会ビルは2019年にひっそりとその姿を消していた。東京銀行協会ビルは、ファサード保存に対する反対意見があったほか、組織の統廃合によって意見が分かれ、結果的にファサード保存がなされていたビルも解体され、全く異なるビルへと置き換えられていった。このように、費用や組織が関連する事柄であるだけに、景観上保存すれば良いといった問題に限定できないのである。企業や組織の象徴でもあるため、記念碑として残す場合もあれば、解体される場合もある。また、オリンピック特需などにより、様々な都市で再開発が実施され、マンション建設等でも注目を集めたのが、神戸旧居留地に残っていた三菱合資会社神戸支店のビルである。当初、三菱合資会社のビルとして使われており、その後、三菱銀行神戸支店となり、最終的にはファミリアホールとなった。しかしながら、阪神淡路大震災による被災と、新たな地震への備えの観点から、費用対効果も考慮し、再開発が決定されたのである。その結果、道路に面した二面を完全保存とし、内部をタワーマンションとして、景観上の影響を最小限にする努力が図られた上で再開発が行われた。現在は、「三菱地所 ザ・パークハウス神戸タワー」として現存している。1・2階の保存部分は、共用部として使用し、銀行だった当時の金庫や列柱などが残され、外観の保存に留まらず、内観の保存も積極的に実施している。このようにアップデートしながらも、歴史を継承していくといった取り組みも実施されている。

また、藤森[9]の中でも、歴史的建造物の保存や都市景観に関して触れられているが、

完全保存は難しいといった指摘もある。岡本[10]、岡本[11]、岡本[12]は、残された図面などをもとにして過去の景観を検証するといった研究も行っており、都市と建築と景観をテーマにした研究は現在注目を集めている。また、野村[13]、野村[14]の中では、歴史的建造物の再生や継承設計について盛んに議論がなされていた。

しかしながら、人類が歴史的建造物の保存をする努力をしたとしても、姿形あるものはいずれ朽ち果てて失われゆくものであり、現在、ファサード保存がなされたとしても、100年後には再び保存か解体かの議論になるため、現物のみで100年200年と半永久的に残していくことは非常に難しいことである。また、人々のライフスタイルも変化すると同時に、社会インフラも日々革新されているため、あらゆる方向から保存に関する議論をする必要がある。本研究では、失われつつある歴史的建造物を情報の観点から分析し、どのような方法でどのような情報を保存し継承していくべきか、これまでの現地調査の結果をもとに、建造物の置かれた状況を紐解き明らかにする。

3. 歴史的建造物の状態と残された情報

3. 1 東京駅丸の内駅舎



図 2. 東京駅丸の内駅舎

正式名称：東京駅丸の内駅舎／中央停車場

設計者：辰野金吾

所在地：東京都千代田区丸の内

竣工年：1914年（大正3年）

解体年：一年（一年）

復元年：1947年（昭和22年）

復元年：2012年（平成24年）

建築概要：地上3階（一部4階）・地下2階建て

建築構造：鉄骨煉瓦造・RC造

建築様式：辰野式フリー・クラシック、英国風クラシック様式・ゴシック様式・辰野式

建築状態：現存／復原

解体理由：－

保存理由：日本を象徴する歴史的建造物であるため

東京駅丸の内駅舎は、解体の危機を何度も乗り越え、現代にその姿を残す数少ない歴史的建造物である。また、建設当初の利用目的と同様の目的で使用され続けている貴重な建造物である。韓国のソウル駅駅舎や台湾の高雄駅駅舎なども当該地区において保存継承されているが、利用目的は博物館や記念館になっており、竣工当時のまま使い続けられているわけではない。

東京駅丸の内駅舎は、戦災復興時と高度経済成長期に二度解体の危機を迎えたが、奇跡的に生き永らえ、2014年の竣工100周年記念に向けて、竣工当時の状態へと復原をする運びとなり、保存継承が実施された。しかしながら、調査を進めてみると、

窓枠一個に至るまで情報が存在せず、竣工当時の絵葉書を参照してデッサンをおこして対応したとのことであった。1945年の東京大空襲によって直撃弾は逸れたが、近隣の建造物からの類焼や延焼によって焼失し、外壁の煉瓦を残して屋根や3階部分および内装などの木造部分が焼失し、その後、仮の構造物に置き換えられてしまっていた。その際に、多くの部材は焼失または損傷が激しかった部分は破棄されてしまったため、創造設計／想像設計や類似設計を多用することで対応したとのことである。



図 3. 東京駅丸の内駅舎（竣工当時）



図 4. 東京駅丸の内駅舎（戦後復興後）



図 5. 東京駅丸の内駅舎（復原後）

図 3 は、竣工当時の状態で、図 4 は、戦後復興時の状態、図 5 は、近年行われた復原後の状態である。図 3 と図 5 を比較すると遜色ないように見えるが、ヒアリングの結果、当初材とは異なる素材や材質の部材を使用している部分も多く存在するとのことであった。例えば、屋根の銅板は、竣工当時は緑青銅を使用していたため、経年とともに緑色に変化したが、現在の銅は様々な理由から変色しない銅を使用しているとのことである。

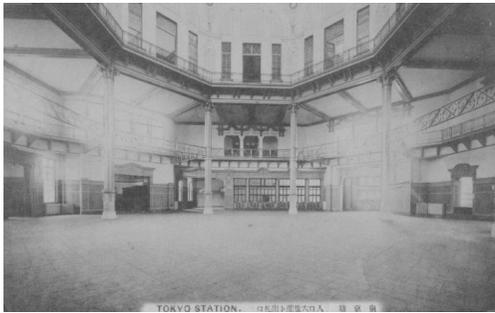


図 6. 東京駅丸の内駅舎ドーム内(竣工当時) 図 7. 東京駅丸の内駅舎ドーム内(現在)

図 6 と図 7 は、東京駅丸の内駅舎のドーム内の様子である。図 6 は、竣工当時の状態で、図 7 は、現在の状態である。雰囲気は似せて作られているが、竣工当時の状態そのままというわけではない。その理由は、時代や用途に合わせた継承設計をしたためであるとのことであった。大正時代は、乗降客数もさほど多くなく、また自動改札機や液晶ディスプレイなども存在しないため、レリーフや装飾品を多く配することが可能であったが、日本のセントラルステーションの役割を担っている現代においては、極力当時の状態を表現しながら、機能的に省略できる部分は省略しているとのことである。



図 8. 乗車券売り場 (竣工当時)



図 9. 帝室用エリア内観 (竣工当時)



図 10. 乗車券売り場(現在)



図 11. 東京駅丸の内駅舎内施設(竣工当時)

図 8 と図 9 は、竣工当時の券売所と帝室用エリアの状態、図 10 は、現在の券売機の状況である。用途の変容によって形状が大幅に変更されている。また、図 9 の帝室用エリアは、現在も存在するが、当時の状態での再現は行っていないとのことである。また図 11 は、竣工当時に東京駅丸の内駅舎内に存在した店舗や施設の内観写真である。東京駅構内に浴場まで存在していたのである。現在は、こうした店舗は、時代の変化によって、飲食店やホテルの一部となっており、当時の施設は現存しない。こうした細かな部分は、情報としてはほとんど残らず、これらの絵葉書が存在しなければ、完全に失われていた情報といえる。

3. 2 三菱一号館



図 12. 三菱一号館（竣工当時）

正式名称：三菱一号館／三菱 1 号館、三菱第 1 号館、第 1 号館、三菱東 9 号館（1918 年以降）

設計者：ジョサイア・コンドル

所在地：東京都千代田区丸の内

竣工年：1894 年（明治 27 年）

解体年：1968 年（昭和 43 年）

復原年：2009 年（平成 21 年）

建築概要：地上 3 階・地下 1 階建て

建築構造：煉瓦造

建築様式：クイーン・アン様式

建築状態：現存／再現

解体理由：オフィスビルアップデートによる建造物置き換えのため

保存理由：後世に対して歴史を継承するため



図 13. 三菱一号館（解体直前）



図 14. 三菱一号館（再現後）

図 12 は、竣工当時の三菱一号館で、図 13 は、解体直前の三菱一号館で、図 14 は、再現された現在の三菱一号館である。このように、同一街区に同一建造物が再現されたことによって、過去の都市の様子が現代に甦り、当時の様子を偲ぶことができるようになったが、一棟のみでは、都市景観全体を理解することは難しい。従って、街区全体の景観を再現するためには、CG (Computer Graphics) や VR (Virtual Reality) や AR (Augmented Reality) などの情報技術に委ねるしかない。



図 15. 丸の内の景観

図 15 は、昭和初期の丸の内を写した写真である。1922 年（大正 11 年）竣工の三菱銀行本店と 1928 年（昭和 3 年）竣工の丸の内八重洲ビルディングが既に建設されているので、昭和初期の一丁倫敦の構成であると考えられる。当時は、小さな街区に煉瓦建築や石造建築が点在し、間を埋めるようにして RC 造建築と木造バラック建築などが存在するといった構成になっていた。煉瓦建築が林立する絵葉書上手前側が一丁倫敦で、RC 造建築が点在する奥側が一丁紐育と呼ばれていたエリアである。こうした街並みも高度経済成長期には、ほとんどが解体され、中超高層ビルへと置き換えられていった。そして、現在では、新たに、複数の街区を統合して巨大な複合ビルへと再度の再開発が実施されており、都市のアップデートが繰り返し行われているため、当時の状態を知るには、三菱一号館と周辺街区外周の道路や路地から把握するしかない状況である。

3. 3 三菱二号館



図 16. 三菱二号館

正式名称：三菱二号館／三菱 2 号館、三菱第 2 号館、第 2 号館

設計者：ジョサイア・コンドル

所在地：東京都千代田区丸の内

竣工年：1895 年（明治 28 年）

解体年：1930 年（昭和 5 年）

復原年：一年（一年）

建築概要：地下 1 階（一部 3 階）・地上 2 階建て

建築構造：煉瓦造

建築様式：ルネッサンス様式

建築状態：消失

解体理由：1934 年（昭和 9 年）明治生命館建設のため

保存理由：－

図 16 は、三菱二号館の竣工当時の状態である。皇居前ということもあり、外壁を赤煉瓦ではなく白色にしたとのことである。しかしながら、これらの建造物は既に解体され消失していることから、当時の様子を知ることは難しい。



図 17. 三菱二号館と東京商工会議所



図 18. 三菱二号館門柱(博物館明治村所蔵)

図 16 と図 17 に写っている三菱二号館の門柱は、図 18 のように博物館明治村において展示が行われている。しかしながら、小さな銘版による表示しかないため、注意深く観察しないと見落としてしまうレベルである。また、柱一本からは、建造物の一部のディテールや様式などを読み取ることはできても、当時の建造物の全容を理解することは難しい。

3. 4 東京中央郵便局



図 19. 東京中央郵便局（竣工当時）

正式名称：東京中央郵便局、東京郵便局、JP タワー
設計者：吉田鉄郎
所在地：東京都千代田区丸の内
竣工年：1931 年（昭和 6 年）
解体年：2008 年（平成 20 年）
復原年：2012 年（平成 24 年）
建築概要：地上 5 階・地下 1 階・塔屋 3 階建て／地上 38 階・地下 4 階・塔屋 3 階建て
建築構造：RC 造／鉄骨造・一部 SRC 造
建築様式：モダニズム建築
建築状態：現存／復原
解体理由：－
保存理由：政治的理由も含む

図 19 は、東京中央郵便局の竣工当時の状態である。東京中央郵便局の保存は、政治的背景もあり、現在のように積極的な保存方法が採用された珍しい例である。ファサード保存に分類されるが、本建造物は、最も先進的で革新的な方法である外壁と外壁を構成する躯体および室内を残すという新たな手法が採用された貴重な例である。一般的にファサード保存をする際には、外壁の薄皮一枚剥がし、新たに建設したビルの外壁に貼り合わせるという手法が一般的であったが、近年、評価が低いなどの影響により、東京中央郵便局の保存方法か、または、一部の棟を完全に保存し、一部を再現するといった日本工業倶楽部会館の保存方法を採用することが多くなっている。



図 20. 東京中央郵便局（復原後、ファサード保存後）



図 21. 東京中央郵便局（復原後、ファサード保存後）

図 20 と図 21 は、東京中央郵便局（JP タワー）のファサード保存後の状態である。この街区は、東京駅丸の内駅舎が復原され、東京中央郵便局もファサード保存されているため、大正・昭和初期の状態を偲ぶことができる街区となっている。さらに、同時に行幸通りも復原されたため、明治時代に構想した街並みがほぼ再現されたことになる。100 尺（31m）の位置で視線を固定して見渡すことで、明治・大正・昭和初期の古き良き時代を感じ取ることができる空間となっている。

3. 5 丸ビル



図 22. 丸ビル（竣工当時）

正式名称：丸ビル、丸の内ビルディング
設計者：桜井小太郎
所在地：東京都千代田区丸の内
竣工年：1923 年（大正 12 年）
解体年：1999 年（平成 11 年）
復原年：2002 年（平成 14 年）（再開発）
建築概要：地上 8 階（一部 9 階）・地下 1 階建て／地上 37 階・地下 4 階・塔屋 2 階建て
建築構造：鉄骨鉄筋コンクリート構造／地上：鉄骨造、地下：鉄骨鉄筋コンクリート造
建築様式：モダニズム建築
建築状態：消失／外壁のイメージを継承
解体理由：老朽化のため
保存理由：丸の内の景観を一部継承するため

図 22 は、丸ビルの竣工当時の状態である。77 年間にわたり使用され続け、老朽化のために解体された建造物である。100 尺の高さで当時の建造物を再現する継承設計が施されており、当時の雰囲気を感じることができるようになっているが、外観は、完全に統一されているわけではないため、当時の完全な状態を知ることは難しい。北側のエントランス内部に竣工当時の三連アーチが再現されており、当時のステンドグラスが再利用されているため、その空間を訪れることで多少は当時の状態を知ることができる。



図 23. 丸ビル（現在）

図 23 は、丸ビルの現在の状態である。一丁紐育と呼ばれていた時代の雰囲気を感じ取ることができるようになっている。



図 25. 東京銀行協会ビル（再現後）

図 25 は、東京銀行協会ビルの再現後の状態である。ビルの外壁に対してファサードを貼り付ける手法であるため、一部形状を変更しての対応であった。この街区は、皇居前の内堀沿いに面しているため、初期のファサード保存としては、ディテール情報をより緻密に再現しているが、ビル建築のため、エントランスの位置が変更されていることや屋根装飾が大幅に変更されているなどの部分が存在した。しかしながら、本建造物は、既に解体されているため、消失状態であり、当時の様子を知ることは難しい状況となった。

3. 7 日本工業倶楽部会館



図 26. 日本工業倶楽部会館（竣工当時）

正式名称：日本工業倶楽部会館

設計者：横河民輔、松井貴太郎他

所在地：東京都千代田区丸の内

竣工年：1920年（大正9年）

解体年：2000年（平成12年）

復元年：2003年（平成15年）

建築概要：地上5階・塔屋1階建て／地上30階・塔屋1階・地下4階建て

建築構造：鉄筋コンクリート造・鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄骨造／鉄骨鉄筋コンクリート造

建築様式：セセッション様式

建築状態：現存／復原

解体理由：老朽化および震災対応とオフィスビルアップデートによる建造物置き換えのため

保存理由：東京駅前ということもあり、景観を継承することを目的としてファサード保存をした

図 26 は、日本工業倶楽部会館の竣工当時の状態である。東京駅前の一等地に建てられた建造物である。



図 27. 日本工業倶楽部会館（復原後）

図 27 は、日本工業倶楽部会館の復原後の状態である。西側の棟を完全保存し、中央棟と東側の棟を再現したのである。初期のファサード保存としては非常に洗練された設計となっている。本手法を採用することで、歴史を継承することができ、かつ景観保存も同時に行うことができるため、最も効果的な手法といえる。

3. 8 早稲田大学恩賜記念館



図 28. 早稲田大学恩賜記念館

正式名称：早稲田大学恩賜記念館

設計者：中條精一郎

所在地：東京都新宿区西早稲田

竣工年：1911年（明治44年）、増築1918年（大正7年）

解体年：1945年（昭和20年）

復原年：一年（一年）

建築概要：3階建て

建築構造：煉瓦造

建築様式：英国風後期ゴシック様式

建築状態：消失

解体理由：東京大空襲の爆撃によって、外壁のみを残して焼失したため

保存理由：－

図 28 は、早稲田大学恩賜記念館の増築後の写真である。写真左側の棟と中央の棟が完成し、数年後に右側の棟が増設されたのである。ここは、研究室や貴賓室などがあり、ここに研究室を構えていた教員は恩賜館組と呼ばれていたとのことである。早稲田大学の中でも特に特徴的であり、慶応義塾大学の図書館と並んで評価の高い建造物であったため、貴重品として大切に保存されてきたが、太平洋戦争時の東京大空襲によって外壁のみを残して焼失した。その後、復元等も検討がなされたが、資金面と安全面から断念したとのことである。現在、この景観は失われており、跡地には早稲田大学7号館が建っている。

3. 9 新橋停車場



図 29. 新橋停車場（竣工当時）

正式名称：汐留停車場／新橋停車場／新橋駅／汐留操車場／汐留駅／汐留貨物ターミナル

設計者：ブリジェンス

所在地：東京都千代田区新橋

竣工年：1872年（明治5年）

解体年：1923年（大正12年）

復原年：2003年（平成15年）

建築概要：地上2階

建築構造：石貼り木造／石貼りRC造一部S造

建築様式：ルネサンス様式

建築状態：現存／復原

解体理由：関東大震災により焼失した

保存理由：鉄道遺産の一つであることと、汐留駅再開発時に住民の要望に応えたことによる



図 30. 新橋停車場（再現後）

図 29 は、新橋停車場（竣工当時）であり、図 30 は、新橋停車場（再現後）の写真である。どちらも遜色なく見えるが、構造上は全く異なる建造物である。しかしながら、景観保存の面では、三菱一号館の完全再現以前に実施された事例であり、情報が乏しい中で、遺構と写真をもとにここまで景観保存がなされた貴重な例である。

3. 10 国立駅



図 31. 国立駅駅舎（復原後）

正式名称：国立駅駅舎

設計者：河野伝

所在地：東京都国立市

竣工年：1926年（大正15年）

解体年：2006年（平成18年）

復原年：2020年（令和2年）

建築概要：木造

建築構造：平屋建て

建築様式：ロマネスク様式

建築状態：現存／復原

解体理由：JR中央線高架化再開発事業進行のため

保存理由：行政や住民からの要望があったため

図 31 は、国立駅駅舎（復原後）の写真である。2006年に中央線が高架化されるにあたり、旧駅舎は廃止となり、解体が決定したが、住民からの強い要望があり、将来の復原に向けて部材が全て保存されることになった数少ない事例である。当初、新駅舎として復原する案もあったが、駅の構造上の問題や、駅舎の広さの問題によって、そのまま駅として再利用されることはなかった。しかしながら、歴史文化情報発信交流施設として利活用されることになり、歴史や文化を現在に伝えている。中は、待合スペースと歴史文化スペースと職員スペースになっており、街の中心部にある博物館的役割を担っている。さらに、当初の場所と同一の場所に復原されているため、景観上も当時の様子を伺い知ることができるようになっている。また、解体直前の状態ではなく、大正時代の竣工当時の状態に戻されたことによって、大正浪漫を感じることができる。また、解体直前の状態ではなく、大正時代の竣工当時の状態に戻されたことによって、大正浪漫を感じることができる。また、解体直前の状態ではなく、大正時代の竣工当時の状態に戻されたことによって、大正浪漫を感じることができる。

3. 1 1 旧神戸居留地十五番館



図 32. 旧神戸居留地十五番館（復原後）

正式名称：旧神戸居留地十五番館

設計者：不明

所在地：兵庫県神戸市中央区浪花町

竣工年：1880年（明治13年）

解体年：1995年（平成7年）

復元年：1998年（平成10年）

建築概要：2階建て・棧瓦葺

建築構造：木骨煉瓦造

建築様式：コロニアル様式

建築状態：現存／復原

解体理由：阪神淡路大震災による倒壊被害のため

保存理由：旧神戸居留地で現存する数少ない歴史的建造物であったため

図 32 は、旧神戸居留地十五番館（復原後）の写真である。阪神淡路大震災によって一度は倒壊したが、死傷者を出さなかった数少ない建造物であったため、同一街区に復原することができた貴重な建造物である。旧神戸居留地内で個人が所有していた洋館で現存するものはこの一棟のみとなっている。様々な外国商館や大使館などとして使用され、その後、株式会社ノザワが取得したことによって、保存される運命を辿った。阪神淡路大震災以前には、国の重要文化財登録がなされていたため、詳細に実測した実測図面などが残っていたことや、津波等が発生しなかったため、部材が同一街区から散逸しなかったことなどが保存へとつながった。

3. 1 2 哈爾濱駅



図 33. 哈爾濱駅（竣工当時）

正式名称：哈爾濱駅

設計者：東清鉄道

所在地：中国黒龍江省哈爾濱市

竣工年：1903年（明治36年）

解体年：1950年（昭和25年）、1989年（平成元年）

復原年：2017年（平成29年）

建築概要：2階建て／5階建て

建築構造：鉄筋コンクリート造／鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造

建築様式：アールヌーヴォー様式

建築状態：現存／復原

解体理由：老朽化のため

保存理由：不明



図 34. 哈爾濱駅（現在）

図 33 は、哈爾濱駅の竣工当時の状態であり、図 34 は哈爾濱駅の現在の状態である。1960 年代に一度解体され、鉄筋コンクリート造の全く別の駅舎が建設され、使用されてきたが、その建造物も老朽化したため、開業当時の駅舎をモチーフにして新たな駅舎を建設しているとのことであった。規模は、開業当時の駅舎の数倍にもなっているが、ディテールは、当時の駅舎を模している。建設位置は、当時の駅舎と同一街区であるため、旧ヤマトホテルや旧南満州鉄道の庁舎との位置関係から当時の景観を知ることが可能であった。しかしながら、規模が拡大されていることと、駅前広場は解体されていること、さらには、市電が廃止されているため、完全に当時の状態で保存されているわけではない。また、似ていれば良いといった再現方法であるため、完全なる復原とは言えない。

3. 1 3 天津日本租界旭町



図 35. 天津日本租界旭町（加藤洋行ビル）

正式名称：天津租界旭町（加藤洋行ビル）

設計者：－

所在地：中国河北省天津市

竣工年：1901年（明治34年）

解体年：1945年頃（昭和20年頃）

復原年：一年（一年）

建築概要：4階建て

建築構造：煉瓦建て

建築様式：－

建築状態：消失

解体理由：不明

保存理由：－

図 35 は天津日本租界旭町の当時の写真である。右側の「加藤洋行」の建造物が特徴的なストリートであり、旧日本租界のメインストリートとなっていた。現在も天津のメインストリートになっており、図 36 に示した和平路として再開発されている。図 36 は、図 35 と同じ場所から撮影したもので、「加藤洋行」は解体されていたが、奥にある塔屋が象徴的な百貨店は当時のまま残されていた。当時と比較すると、高層建築が増加しているため、小規模建築物に見えるが、当時としては、高層建築の一つであった。概ね再開発が進み、ほとんどの建造物が解体されていたが、図 37 や図 38 に示した建造物は、当時のまま保存されていた。左側の時計台は、色が変更されていたが、それ以外はさほど手を加えられていない状態であった。さらに、右側の建造物は屋根部分の装飾が撤去されていたが、それ以外は当時のままであった。このようにメインストリートに面している建造物であっても、特徴的なものは保存され、当時の様子を偲ぶことができるようになっていた。



图 36. 和平路



图 37. 天津租界旭街



图 38. 和平路

3. 1 4 天津神社



図 39. 天津神社

図 39 は、天津神社の当時の状態である。図 40 は、天津神社跡である。既に当時の面影は残っていないが、唯一現存するのは、神社の社務所として使用されていた左側に写る建造物が、現在も保存されていた。外壁が変更されているが、屋根や形状が同一であった。この建造物の横には、川島芳子が中華料理店を営んでいた「東光楼」の建造物が残されていたため、旧地図上での位置関係から当該建造物が神社の社務所であると判明した。神社の建造物の大半は解体されていたが、こうした一部の建造物から当時の状態を知ることができるようになっていた。



図 40. 旧天津神社跡

3. 15 天津租界（消失街区）

図 41 と図 42 は、天津租界の当時の景観を写した写真である。こうした場所にも訪問したが、公園や道路は残されているので位置関係までは判明したが、建造物は概ね解体されており、当時の様子を知ることは不可能であった。このように、旧租界地は、街区や道路は同一のものが多いが、歴史的建造物は解体されているといったケースが多く、図 43、図 44、図 45 に示したように、租界地があったという根拠を示す標柱が残るのみである場所も多かった。



図 41. 旧天津租界景観

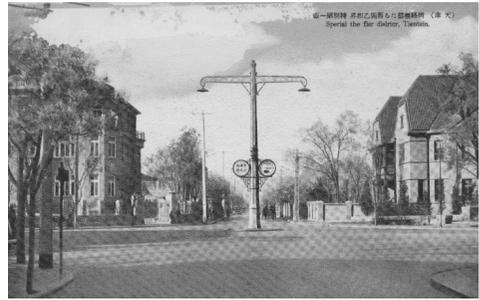


図 42. 旧天津租界景観

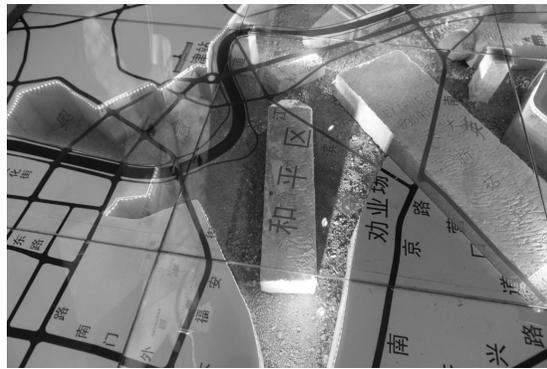


図 43. 天津租界概要と租界標柱



図 44. 旧天津日本租界標柱（現物）



図 45. 旧天津大日本軍用地標柱（現物）

3. 1 6 天津租界（保存街区）

保存されていない歴史的建造物が多くあった一方で、利活用されている歴史的建造物も多いのが中国大陸の大きな特徴である。図 46 は、旧天津日本租界旭町のメインストリートであり、現在の和平路を撮影したものである。旧日本租界と旧フランス租界の境界のあたりに建てられていた銀行建築が残されていた。現在では、ドバイと一位・二位を争うほど美しいと呼ばれる店舗としてスターバックスコーヒーが営業していた。和平路の中間地点に位置し、この街区は天津駅からも程近いため、一大ショッピングモールとなっていた。装飾や電飾は華美なものへと換装されているが、華やかな租界時代を偲ぶ上では貴重な歴史資料といえる。このように再整備し、利活用することで、当時の盛況ぶりを現代に伝えることができる。



図 46. 旧天津租界旭町（和平路）



図 47. スターバックスコーヒー外観



図 48. スターバックスコーヒー内観

さらに、図 49 は天津租界の当時の様子を再現したセットであり、図 50 は、そのセットと同一の場所から撮影した現在の様子である。同一街区に同一の建造物が残されていることがわかる。このように、歴史的建造物も現存し、さらに当時の様子を再現したセットも天津博物館に存在するため、より当時の様子を詳しく知ることも可能であり、レベルの高い景観保存といえる。



图 49. 天津租界セット



图 50. 旧天津租界（现和平路）

3. 1 7 長春市長江路（新京市吉野町）

天津租界のようにレベルの高い保存を行っている都市もあれば、中国大陸でも中途半端な保存を行っている都市も存在する。それは、現在の長春であり、当時の新京である。図 51 と図 52 は、旧日本人街の吉野町を撮影した写真である。いずれも竣工当時の様子を示している。ここでは、一階で家業を営み、二階で暮らすといった外地での特徴的な生活様式であった。



図 51. 吉野町建造物（竣工当時）



図 52. 吉野町建造物（竣工当時）



図 53. 長江路建造物（再現後）

一方で、当時と同じ街区を調査してみると、図 53 や図 55 に示したように再開発が行われており、1~2 階部分に当時のファサードを想起させるような外壁が貼り合わされている状況であった。図 51 の左側奥に見える建造物は、図 52 の左側の建造物と同一のものであるが、同一街区に再現された建造物は、図 53 に示したものになっていた。外観は似せて再現されていたが、似ていれば良いといったレベルであるため、誤った景観保存となっている。また、図 54 と同じ場所を訪れると、図 55 のように、煉瓦風の建造物の再現は行われているが、窓の形状や個数が異なっており、当時の雰囲気や伝えつつも、面影までは再現できていないことは明らかであった。



図 54. 吉野町建造物（再現後）



図 55. 長江路建造物（再現後）

4. 情報保存と情報継承に関する考察

歴史的建造物の情報保存と情報継承において、基本情報としては、「構造情報」、「様式情報」、そして、内藤[8]で規定した「ディテール情報」と、「景観情報」が存在する。本研究における情報とは、「ディテール情報」と「景観情報」を意味することとした。

3章で示したように、現在の歴史的建造物の保存利活用は千差万別であり、統一見解が存在しない状況である。長きにわたり、図面と写真と一部の保存部材を残しておけば良いとされてきた時代が長く続いていたが、近年になり、歴史的建造物の中でも特に近代建築に注目が集まるようになり、保存、復原／復元、再現が積極的に行われるようになった結果、様々な情報が不足することが明らかになった。さらに、現物保存を実施する際には、当初建築に対して忠実性や正確性が求められるようになり、創造設計や想像設計と類似設計は極力排除すべきといった議論がなされてきた。その結果として、当初建築の情報をできる限り収集し、図面と写真、一部の保存部材の他に、当時の関係者へのヒアリングや日誌、日報、日記などの文献などにも当たり、できる限りの情報を得た上で、保存、復原／復元、再現が実施されるようになった。

しかしながら、個々の建造物に対してはそのような対応によって問題解決が行われてきたが、都市全体の景観や街区の状況に関しては、あらゆる情報が失われていることや、散逸していることが多く、当時の様子を伺い知ることは難しい状況である。竣工当時の景観情報を得るためには、当時の絵葉書や記録写真、災害時や戦災時などの被害報告記事などを参照するほかない状況である。また、その街区にどのような建造物が配されているか知るためには、国土地理院の「地図・空中写真閲覧サービス」[15]を参照することで戦前から現代までの変遷を追うことは可能であるが、広範囲を撮影したものが多いため建造物の詳細情報を得るには適していないのである。

このように、都市は日々変化しており、図面や写真による保存だけでは不十分であり、周辺街区を併せて 360°自由な方向から観察できる CG によって保存する必要がある。これまでは、建造物一棟の CG データ化に留まっていたが、都市の街区全体や景観、さらには内観に至るまで CG データ化し、CG によって保存すべきである。

5. 今後の課題

以上に述べたように、歴史的建造物は、解体することによって様々な情報が失われ、後世の人々が過去の様子を知らうとした時には、数枚の写真から想像するほかなく、また、歴史的建造物や過去の都市空間を現物再現しようとした場合にも創造設計／想像設計と類似設計に頼らざるを得ない状況であるため、現物が現存する段階においてCGデータ化しておくことが重要である。一方で、CGデータ化には、3D スキャナーを用いる方法とレーザー計測器で計測し、手入力でCGモデルを制作する方法があり、いずれの方法も膨大な時間と莫大な費用を要するため、CGデータ化作業やアーキビストがアーカイブを制作する作業を効率化することが今後求められる課題である。

【参考文献】

- [1] 玉野惣次郎."大名小路から丸の内へ 江戸絵図が語る丸の内 300 年"菱芸出版,(1995).
- [2] ネコ・パブリッシング."絵はがき、写真、切符で振り返る東京駅の 100 年 東京駅開業 100 周年記念! 1914～2014"ネコ・パブリッシング,(2014).
- [3] 内藤旭惠."写真を用いた歴史的建造物のデジタルアーカイブに関する研究-旧帝国ホテルライト館の事例を通して."静岡産業大学情報学部研究紀要,17(2015):285-342.
- [4] 内藤旭惠,重藤祐紀,岡本哲志,坂井滋和."歴史的建造物保存の現状とその CG 再現に関する検討."情報文化学会誌,23.2(2016):51-58.
- [5] 内藤旭惠,重藤祐紀,堀川華波,岡本哲志,坂井滋和."歴史的建造物の高度な CG 再現におけるディテール情報と素材情報の有効性."画像電子学会誌,46.2.240(2017) : 336-344.
- [6] 内藤旭惠."旧満州における歴史的建造物の現物保存および利活用に関する研究."静岡産業大学情報学部研究紀要,20(2018):245-276.
- [7] 内藤旭惠."歴史的建造物の保存・再現・表現に関する研究 一中国山東省青島市の事例とワークショップ江戸の事例を通して一"静岡産業大学情報学部研究紀要,22(2020):169-202.
- [8] 内藤旭惠."歴史的建造物保存における CG を利用したディテール情報再現の実証的研究."早稲田大学大学院博士論文,(2019):全 156 頁.
- [9] 藤森照信."東京人 特集:東京なくなった建築"都市出版,213(2005).
- [10] 岡本哲志."丸の内における都市建築空間の形成とストリートスタイルの創造 ～日本で活躍した建築家が果たした役割を踏まえて～"法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室,(2015).
- [11] 岡本哲志."東京のストリート景観と路地空間～銀座・丸の内・神楽坂～"法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室,(2016).
- [12] 岡本哲志."江戸→TOKYO なりたちの教科書 2 丸の内・銀座・神楽坂から東京を解剖する"淡交社,(2018).
- [13] 野村和宣."生まれ変わる歴史的建造物・都市再生の中で価値ある建造物を継承する手法-"日刊工業新聞社,(2014).
- [14] 野村和宣."再開発における歴史的建築物の価値継承のための保存・再現手法"東京工業大学,(2019).
- [15] 国土交通省国土地理院."地図・空中写真閲覧サービス"国土交通省国土地理院,(2020)
:<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1> (2020 年 9 月 14 日閲覧) .